

# Z得点化したSLTAで算定した失語の重症度の有効性の考察

— 本学会雑誌原著論文掲載のSLTA表を参考にして —

赤星 俊

コミュニケーション障害臨床研究所 あかぼし企画

## 【目的】

SLTA得点をZ得点化し、一定の方法で算定した失語の重症度について検討する。

## 【方法】

(1) SLTA下位項目得点を以下の手順でZ得点化した。

[  $z=10(x-m)/\sigma+50$  の式に以下の数値を代入し算出 (得点x, 平均m, 標準偏差 $\sigma$ ) ]

SLTAの「聴く」「話す」「読む」「書く」「計算」領域ごとにz得点を平均し、その5領域の平均をSLTA表から算定した失語の重症度(以下SLTA算定重症度)とした。

(2) SLTA算定重症度が45点未満を重度、45点以上55点未満を中度、55点以上を軽度とした。

(3) 本学会創刊から最近論文集までの原著のうち、以下の条件を満たすSLTA表を選択した。

- ・検者がSLTAのすべての下位項目の検査を行っていること
- ・SLTA表の粗点は個人から得た得点で正確にプロットされていること
- ・非失語150人平均より1標準偏差値以下の得点を示す下位項目(計算を除く)が一つ以上あること(失語有無の判断基準とした)
- ・被検者の母国語が日本語であること

(4) (3)で選択されたSLTA表のうち、重度(重篤、全失語を含む)・中度・軽度またはそれに準ずる語彙で失語の重症度が記載されているものを選定し、SLTA算定重症度を求めた。

(5) 原著論文中で記載された失語の重症度とSLTA算定重症度とを比較検討した。

## 【結果】

(3)を満足するSLTA表は268例であった。

(4)の原著論文中に失語の重症度が掲載されたものは72例(26.9%=72/268)であった。

SLTA算定重症度は重度が25例、中度が25例、軽度が22例であった。

(5)は原著論文中に記載された重症度とSLTA算定重症度をマトリックスにとりカイ自乗検定を行ったところ明らかに有意差があることが検せられた。

		原著論文中で記載された失語の重症度						計
		非失語	軽度	軽～中度	中度	中～重度	重度	
算定失語重症度	軽度	3	14	2	2	1		22
	中度		13	1	8		3	25
	重度		1		1	2	21	25
	計	3	28	3	11	3	24	72

$$\chi^2 = 64.2 \quad \chi_{.01}^2(10) = 23.2 \quad \chi^2 > \chi_{.01}^2(10)$$

## 【考察】

Z得点化したSLTA表から算定した失語の重症度の有効性が示唆され、当失語重症度算定法の使用は本学会原著論文中に失語の重症度の記載率が極端に低い(約27%)事象課題の解決に貢献できると思われた。